

二〇一五年度

二月二日入試

国語 (50分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、2-1 から 2-14 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

わたし(よっちゃん)のおじいちゃんは「峠うどん」の主人で修吉しゅうきちといいます。街のうどん組合理事長の源さんは、おじいちゃんとともに有名なうどん屋で修業した仲間です。

今、街ではテレビや新聞を通して「語り継ぐ大水害の記憶」という合同企画が展開され、新聞に掲載された一通の女性からの手紙が話題になっていました。それは、五十年ほど前の大水害の後、がれきの広がる中で、水害で何もかも失った人たちに、急ごしらえの窯かまでうどんを作ってふるまった若い職人さんの話でした。当時、街の紡績工場ぼうせんこうじょうで働いていたこの女性は、具材の代わりに柿の葉の載ったうどんをがれきの上で食べて希望がわいたという内容でした。その柿の葉うどんを作ったのがわたしのおじいちゃんであることを知った源さんは、おじいちゃんに次のようなことを訴えたのでした。

「……なあ、これは目先の商売で言っているんじゃないんだ。シユウ公は弟子をとってないからわからないかもしれないけどな、いま大変だよ、うどん屋は。職人のなり手もどんどん減ってる。このままじゃ、じり貧だ。みーんな共倒れだ。少しくらいは、若い奴らにいい夢を見せてやろうじゃないか。うどん職人も捨てたもんじゃないんだぞっていうのを教えてやって、将来の夢や希望を与えてやろうじゃないか。それが年寄りの務めだよ。」

源さんの切々とした訴えに、おじいちゃんの心も動いた。腕組みがゆるみ、口の「へ」の字の曲がり具合も少しなだらかになった。

長い付き合いだ。ここぞというタイミングは源さんにもわかる。

いまだ、と源さんはつづけた。

「柿の葉うどん、いい話じゃないか。最高だよ。なあ、シユウ公、覚えてるだろ？ いまでもまだつくれるだろ？ 柿の葉うどん。」

「つくれても……知らん。」

どひゃあ、とずっこける一同をよそに、おじいちゃんはあらためて腕を深く組み直し、口をキュッと結ぶ。そこから源さんは延々と説得をつづけた。総会が終わったあとも「店まで送っていくから。」と強引ごういんに助手席すわに座らせた車の中で、ひたすらおじいちゃんを説得していった。

源さんはおじいちゃんが「元祖」を名乗ることにこだわっていた。著作権とか知的所有権とか、どこまで正しいのかは知らないけど、いろんな法律まで出してきた、とにかくあんたが「元祖」を名乗ってくれないと困るんだ、と言いつづけた。

車が『峠うどん』に着く直前、ようやくおじいちゃんは折れた。

ただし、その折れる方向は、源さんの考えとは正反対——「元祖」を名乗らなくていいのなら柿の葉うどんのレシピを伝える、と言ったのだ。

柿の葉うどんは、源さんが推理したとおり、若き日の修吉さんが自分の練習用に買いだめしてあった小麦粉で打ったうどんに、ありあわせの材料でつくったつゆを合わせたものだ。

いまからうどんを打っている時間はないので、今日は店で出しているうどんを使う。

「でもな、実際はこんなものじゃなかったんだ。粉も安物の三等粉だし、水も濁った井戸水をなんとか漉したやつだ。寝かせる時間もうろくにとつてないし、温度も適当だ。だいいち、半人前の俺が打ってるんだ。ほ

んとうなら、ひとさまに出せるよううどんじゃないんだよ。」

おじいちゃんは念を押して源さんに言う。口調はあいかわらずぶつきらぼうだけど、念を押すということ
じたい、おじいちゃんにとっては珍らしいのだ。

「つゆもひどいもんだ。返しなんて、さすがにアパートじゃつくってないからな。だしは昆布にさば節だけ
だ。」

※「うるめは？」

「そんなものあるか。昆布も並浜の四等だ。」

「四等か、そりゃあどうもキツいなあ……。」

「俺の稽古用なんだ、贅沢言うな。今日はアレだ、店で出すやつじゃなくて、佃煮にしようと思って買ったのがあるから、それを使うけど、ほんとうはそれでも贅沢すぎるんだからな。」

わたしはうどんの材料の良し悪しなんて全然知らないけど、おじいちゃんの話の横で聞いているだけでも、かなり粗末なものだというのはわかる。源さんも、いくらB級グルメとはいえ、あまりにも貧乏くさいレシピに腰が退けてしまったかもしれない。

でも、それがあの日の、あの時代の、希望の味だったのだ。

テーブルですわっていたおばあちゃんが、「よっちゃん、ちょっと付き合ってくれませんか？」と席を立った。

⑤「どこに行くの？」

「葉っぱ。」

「え？」

「このへんに柿の木はないけど、まあ、急な話だから勘弁してもらって、似たような葉っぱを二、三枚拾ってこようよ。」

(中略)

「じゃあ、よっちゃんはあっち、おばあちゃんはこっち側を探すから。」

お互いに背中を向けてしゃがみ込む格好になった。

「まあ、アレだよねえ、源さんにも気をつかわせちゃってるよねえ。」

視線が合わないほうが話しやすいのか、葉っぱを拾うついでのおしゃべりだから気が楽なのか、おばあちゃんの声はのんびりと、気楽なテンポになった。

「ウチの商売のことを考えて、ああいうことを言ってるのよ。」

「そうなの？」

「うん。『元祖』だと箔も付くし、ほかのお店のひとにも、さすが『峠うどん』の修吉さんだって一目置いてもらえるし、ここどころ『みやま亭』にお客を持って行かれてるのをどこかで聞いたんじゃない？」

まったくおせっかいなんだから、よけいなお世話だつていうのよ、ほんとに。」

「でも、おじいちゃん、みんなのために柿の葉うどんのつくり方を教えるとか、けっこういいところあるんじゃない？」

「なに言ってるの、おじいちゃんにはいいところしかないんだよ。」

きっぱりと言った。孫娘のくせにそれくらいわかんないのかい、という追い打ちの一言も、耳には聞こえなかったけど、胸に響いた。

⑥「まいつちやっとなあ、と背中がくすぐったくなってしまったわたしに、おばあちゃんは「でも、まあ……。」と話をつづけた。」

「源さんが、若い職人さんに希望を与えたい、って言ったのが意外と大きかったのかもしれないね。おじいちゃん、ああ見えて、希望とか夢とか未来っていう言葉、好きだから。」

「そうなの？」

「うん。つらい思いや大変な苦勞をすればするほど、前に向かって進む言葉が好きになるものだからね。」
それはきつと、おばあちゃんも同じなのだろう。

大水害の翌日、まだ水が退かない街の片隅で、せつせとうどんを打つ修吉さんの姿が目につく。きつと駒子さんがたきつけたのだ。みんなおなかを空かせてるんだから、おいしいうどんを食べさせてあげようよ、こういうときでもないと自分の打ったうどんを食べてもらえないだし、なんて言う駒子さんの声も聞こえる。

「ねえ、おばあちゃん。一つだけ、質問。」

「なに？」

「柿の葉をどんぶりに入れたのって、おばあちゃんのアイデア……だよな？」

正解だった。おばあちゃんは「ちょっとぐらいい色がないと寂しいからね。」と言うだけで、あんがいそれが本音なのかもしれない。それでも、柿八年の気持ちで明日からの復興をあせらず、あきらめず、お互いがんばりましょうね、という気持ちももっていたんだと勝手に決めさせてもらった。

店に戻ると、ちょうど五十年ぶりの柿の葉うどんができあがったところだった。

拾ってきたケヤキの落ち葉を水洗いして、そつとうどんに載せた。

あれほどぶつくさ言っていたくせに、いざできあがってみると、おばあちゃんが誰よりも感慨深そうな顔をしていた。

「やっぱり柿の葉のほうがツヤツヤしてるし、色も複雑だから味わい深いんだけど、まあ、これでも悪くないね、合格合格。」

ケチをつけながらも満足そうに言う。

逆に源さんのほうは、つゆの味が気に入らないらしく、「こんなに腰が弱いと、ちょっとアレだよなあ。」と首をひねる。もともと、この地方のうどんのつゆは濃い目に仕上がっている。だからこそだしがしっかりしていないと、醤油に負けてしまうのだ。

一方、おじいちゃんはおじいちゃんです。「こんなに上等なものじゃなかったんだ、もつと安っぽくて、ぼそぼそしてて、どうしようもない味だったんだよ。」と、妙にぶんぶん怒っている。五十年前の柿の葉うどんのマズさをなめるんじゃない、と言いたげだった。でも、それは謙遜でも、ひねくれているのでもなく、いまのおじいちゃんから修吉さんへの友情の証なのかもしれない。

「で、どうするの？ こんなうどん、ほんとに街じゅうのうどん屋さんで出すわけ？ たとえ由来が美談だったとしても、この味だと赤っ恥をかくのがオチだし、うどんの街の看板に泥を塗っちゃうよ。」

おばあちゃんに言われた源さんは、「うーん……確かになあ、ここまでだとは思わなかったなあ……。」と考え込んでしまった。

すると、今度はおじいちゃんが「泥を塗るほどひどいわけないだろう。」とムスツとしてヘソを曲げてしまう。職人のプライドは傷つきやすく、逆鱗だらけ——まったく扱いにくいひとなのだ。

でも、そんなおじいちゃんも、わたしには優しく、甘い、はずだ。

「わたしも食べてみていい？」

おじいちゃんとおばあちゃんと源さん、それぞれの複雑なまなざしを浴びながら、ズルズルツとうどんをつゆと一緒に啜り込んだ。

おいしくない。

悪いけど、ほんとうに。

箸を置いた。おじいちゃんを見て、源さんを見て、最後におばあちゃんを見て、ごめんなさい、と頭下げようとしたときだった。

⑩「これが希望の味だよ。」

おばあちゃんが言った。わたしを教え諭すような、かばうような、励ますような、逆にはねのけるような、叱りつけるような、静かなのにピシヤリと強く響き、キツそうなのに奥のほうがやわらかそうな、なんともいえない口調だった。

「五十年前に、これを食べ、元気を出してくれたひとがいたんだよ。」
今度はわかる。優しい声だ。

「この味がおいしくないっていうのは、他にたくさんおいしいものがあるってことだよ。それでいいよね、幸せだよ、この子たちも、わたしたちも。」

ねえ、とおばあちゃんは源さんを振り向いた。ねえ、そうだとおじいちゃんにも目を向けた。

源さんは、うんうん、そうだ、ほんとだよなあ、としみじみうなずいて、どんぶりに手を伸ばした。

「シユウ公、コマちゃん、俺ももう一口啜らせてもらおうよ。初心に戻って、この老いぼれも組合のためにもう一踏ん張りしなきゃなあ。」

ズズズツとどんぶりの縁から啜る。

⑪「マズい……でも、うまいんだなあ、うん。」

(重松 清「峠うどん物語」より)

※(注) じり貧——どんどん悪くなっていくこと。

返し——砂糖に醤油を加えて寝かしたもの。だしと合わせてつゆを作る。

さば節——さばをかつお節のように加工したもの。かつお節より下級とされる。

うるめ——うるめとよばれるいわしの一種を、かつお節のように加工したもの。

並浜の四等——昆布のなかでも下級の昆布。

箔——値うち・評価。

逆鱗——触れると怒りを買う部分。

問一——線①「うどん職人も捨てたもんじゃありません」とありますが、「うどん職人も捨てたもんじゃありません」とはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア うどん職人は、なり手は少ないが、やりがいのある仕事だということ。

イ うどん職人は、おいしいものを作る、みんなのあこがれの仕事だということ。

ウ うどん職人は、世の中から見捨てられた人間がやる仕事ではないということ。

エ うどん職人は、世間の人々が考えているほど簡単な仕事ではないということ。

問二——線②「腕組みがゆるみ、口の『へ』の字の曲がり具合も少しならかになった。」とありますが、おじいちゃんほどのようなことに心を動かされたのですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 長年苦勞をともにしてきた源さんの、若いうどん職人を育てて、もうかる商売をしたいという思いに何となく心を動かされた。

イ 弟子の育成に悩んでいるおじいちゃんの仕事を少しでも楽にしたいという源さんのやさしさに心を動かされた。

ウ 苦勞をしている若い職人さんを思うと、修業の始めに誰もが持つ悩みを軽くしてやろうという源さんの心意気に心を動かされた。

エ 苦勞してきたおじいちゃんだけに、源さんの若い職人さんに希望を与えたいという言葉に心を動かされた。

問三——線③「源さんはおじいちゃんが『元祖』を名乗ることにこだわっていた。」とありますが、「『元祖』を名乗る」ことよってどのような利点があると考えられますか。それが述べられている部分を文中から四十五字以上五十字以内でぬき出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

問四——線④「『元祖』を名乗らなくていいのなら柿の葉うどんのレシピを伝える」について次の1・2の問いに答えなさい。

1 おじいちゃんはず「元祖」を名乗ることを拒否するのだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「元祖」という肩書きを店に出すことで、なぜか落ち着かない気持ちになるのではないかという不安があるから。

イ 「元祖」という肩書きはありがたいけれど、これからその肩書きにみあった仕事をしなければならぬと思うとつらいから。

ウ 半人前の自分が打ったうどんであり、「元祖」という肩書きがつくような完成された一品ではないから。

エ 自分の追求める最高のうどんをつくるのが、「元祖」という肩書きをもらうことによってもできなくなるという心配があるから。

2 「柿の葉うどんのレシピ」とありますが、そのレシピを聞いた「わたし」は柿の葉うどんをどのようなものだと考えましたか。次の文の□にあてはまるように、文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

□ だと思った。

問五 ——線⑤「葉っぱ」とありますが、これは「柿の葉」のことです。駒子さんはどのような目的でうど
んの上に「柿の葉」を浮かべたのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を
答えなさい。

- ア 急ごしらえの安物のうどんのつゆの味を整えるため。
- イ 柿の葉はこの街の名物品であり、香りもよいため。
- ウ あたたかいつゆになじんでまろやかな食感を出すため。
- エ うどんにのせるものがないのでせめて色彩を添えるため。

問六 ——線⑥「背中がくすぐったくなってしまった」とありますが、わたしはなぜ「背中がくすぐったく
なっ」たのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア おばあちゃんが自分の夫をすばらしい人だとほめるのを、気はずかしく思ったから。
- イ 孫である私に気を許して、自分の夫を良く言うおばあちゃんをいとしく思ったから。
- ウ おばあちゃんが尊敬していたおじいちゃんを悪く思っていたことに対し、申し訳なく思ったから。
- エ 孫であるのにおじいちゃんの良さに気づいていなかったことに気がつき、情けなく思ったから。

問七 ——線⑦「せっせとうどんを打つ 修吉さんの姿が目浮かぶ。きつと駒子さんがたきつけたのだ。」
とありますが、おじいちゃんとおばあちゃんをそれぞれ「修吉さん」「駒子さん」と呼ぶことで、二人
のどのような姿を表していると考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その
記号を答えなさい。

- ア 信頼を寄せあう二人の姿
- イ 二人の若いころの姿
- ウ 利益を一番に考える二人の姿
- エ 自分たちの世界にひたる二人の姿

問八 ——線⑧「おばあちゃんが誰より感慨深そうな顔をしていた。」とありますが、なぜ「感慨深そうな
顔をしていた」のですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 自分の夫の職人としての力を再び感じとることができたから。
- イ 自分のアイデアがいかされたうどんを五十年ぶりにみたから。
- ウ 自分と夫の共同作業の世界を源さんにもせてやることができたから。
- エ 自分が作って希望を与えたいうどんを、孫娘に食べさせられるから。

問九 —— 線⑨「うーん……確かなあ、ここまでだとは思わなかったなあ……。」とありますが「ここまでだとは思わなかった」とはどのようなことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 水害で設備もない中で作ったうどんが、こんなにうまいとは思わなかった。
- イ 四等品の材料を使って作ったうどんが、こんなにうまいとは思わなかった。
- ウ いくら悪い材料で作ったうどんとはいえ、これほどまずいとは思わなかった。
- エ まだ若い職人が作ったうどんとはいえ、これほどまずいとは思わなかった。

問十 —— 線⑩「これが希望の味だよ。」とありますが、まずいのに「希望の味」と言っているのはどのような事実を前提にしているのですか。解答らん「こと」につながるように文中から二十五字以上三十字以内でぬき出して、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問十一 —— 線⑪「マズい……でも、うまいんだなあ、うん。」とありますが、源さんはどのようなことを信じたのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 五十年前の水害の様子が柿の葉うどんを食べたことではつきりと思い出されて、うどんを提供した当時の喜びを今しっかりと確信した。
- イ 五十年前の水害によって何もかも失った人たちが、一致団結してうどんを作り、街の復興に努めたことを確信した。
- ウ 五十年前の水害で、家や家財をなくして生きる意欲をも失っていた人たちに希望を与えたうどんが、この柿の葉うどんであったことを確信した。
- エ 五十年前の水害で、家も家族も失ってしまった人たちにふるまったうどんのつゆの味が、この柿の葉うどん再現できたことを確信した。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

ある日本人がアメリカの研究所へ行って仕事をするようになった。しばらくすると、なぜか、この研究者は、ひどく評判が悪くなりだした。ほかの日本人が心配して、わけをきいてみると、理由はささいなことであつたのである。

その研究所では来た郵便物がオフィスの一隅いちぐうの各人ごとの郵便受けに仕分けされていた。所員はそこへ自分の郵便をとりに行く。もちろん、この日本人も毎日のように、そこへあらわれた。

そこに問題のきつかけがあつた。オフィスには若い女性がなん人も事務をとっている。そこを通るのだからたいいていの人は、なにかひとことという。女の子たちもそれに応ずる。ところが、この日本人研究者は仕事をしている人たちの妨さまたげになつては悪い、とでも思つたのであろう。いつも黙だまつて来て、郵便物をもつて知らん顔をして黙つて帰つた。

これが不評の原因であつた。あの日本人はわたしたちを無視している。ひどい、けしからん、というので女性たちが腹を立て、それがほかの人たちにも広まって、彼は変人であるとされてしまったというしだいである。

日本では、こういう場合、あいさつをしなくてもいい、となつているところがすくなくない。へたに女子に声をかけたりすれば、そのほうがかえつて変に思われるということだつてありうる。ことばもあまり自由でない異国のことである。緊張きんちやうしていたのであろう。軽口をたたく気持ちのゆとりのあろうはずもない。かりにそれだけの度胸があつても、ジョークは出てこないだろう。

この日本人は同情される。しかし、A。黙っているのは、たいへんな失礼になる。外国人だからといって、大目に見てもらふことはできない。

まったく見ず知らずの人間同士なら、いくら近くをすれちがつても、知らん顔していなくてはいけない。声をかけたりしたら、それこそ危険人物視される。満員電車の中でハナとハナをつき合わせていても、「やあ、こんにちは、ずいぶんこみ合いますな。」などといつてはいけない。

② ハナをつき合わせているのは、人間にして人間にあらず、木石と考える。それがラッシュの乗物の中のチケットである。

さきの日本人研究員をしたことは、まさに、それで、オフィスの人たちを、人間として認めないぞ、という意志表示をしたのと同じである。そういうことを毎度くりかえされればおもしろくないのは当然である。アメリカは下＊ライ＊な社会である。仕事さえしていれば、よけいな社交など不要である。ひよつとすると、この日本人にはそんな考えがどこかにあつたかもしれないが、とんだ誤解である。③

人間の住むところ、すこしでも知つたもの同士が出会つたら、あいさつは不可欠である。それを怠おこたれば、相手を満員電車の中のとりの人間と同じように木や石のように無視することになる。はなはだ挑発ちやうはつてき的な態度である。

人間と人間とが接近すると、摩擦まさつを生ずる。熱が出る。あるいは火花が散る。まずい。それをやわらげる潤滑油じゆんかつゆがあいさつだ。

ことばには意味があるが、こういうあいさつには、意味らしい意味がない。

「おはよう。」

といっても、相手が早くやってきたということではない。なにか言わないと角aが立つから、声を出している

④にすぎない。けっして早くないから、というので「おそよう。」

などといえ、これはあいさつではなくなって、ことば本来の意味をもつようになる。相手は不快に思う。あいさつの語にパロディは禁物である。⑤b テイケイがきまっている。崩すことは許されない。

あいさつをかわしたあと、ひっかかるようなのは、すでにあいさつではない。風のごとく来たり、風のごとく去る。これがあいさつである。

人間はだれしも、まわりに目に見えない封筒の⑤ような筒をもっている。心理的なナワ張りである。その中へはほかのものの入ってくることを許さない。入ってくるものは承認を求め⑤る必要がある。だまってその枠の中へ飛び込んでくる人間があつても、ラッシュの乗りものの乗客同士のように、たがいに人格を認めない。モノである。無視することで、かろうじて衝突をさける。

デパートから帰ってくると、独特な疲れ方をしていいる。それほど歩くわけでもなければ、体を使うわけでもないのに疲労感が大きい。心理の筒をたえず侵入されているためだと思われる。それに無意識に反発しているから、ああいうふうに疲れるのであろう。

デパートよりもっと静かな絵などの展覧会を見て帰ったときも同じように疲れているが、やはり、心理的ナワ張りを犯されるのが原因だと想像される。

⑥ こういうことは半ば動物的本能によるのかもしれない。イヌなども、知らないイヌが急に近づくと、これに攻撃を加えようとする。ナワ張りを無視して入ってきた警戒すべきものだからである。

トラブルを避けるにはイヌとしての仁義を切る必要がある。敵意はないということをはっきりしてからでない、ナワ張りの中へ入るのは危険である。イヌにもあいさつがある。

動物だってそうなら、人間が知らん顔をしてほかの人のナワ張りを侵犯してよいわけがない。満員電車、デパート、展覧会にかぎらず、およそ人ごみのところへ出るとひどく疲れるのは、あいさつなしに、ナワ張りの中へつぎつぎ入ってくるものがあるからである。いくらそういうものを木石だと思おうとしても、なおかつ心のどこかで、それに違和感をもつ。

あいさつは、人間としてナワ張りの筒と筒とがふれ合うところで、タイのないあかしとして提出されるパスポートである。

知り合いでなくても、あいさつは必要なことがすくなくない。道を歩いていて、すれちがいざまに、体の一部がふれたとする。そのとき、ひとこと、

「失礼！」

といえ、相手もつりこまれて

「失礼！」

と応じる。二つのナワ張りはぶつかったが、火花は散らさないのですむ。

B、知らん顔をして通りすぎてしまう人が多い。相手が、運悪く感情的に不安定な、一触即発の状態にあるときだったりすると、

「ぶつかっておいて、あいさつもしないのか！」

というようなせりふが飛び出す。そこで、「すみません」とやればなんでもないが、受ける側の情緒も安定していないと、売りことばがあるなら買おうじゃないか、となる。

「好きでぶつかったわけじゃないのに、なぜあいさつがいるのか。」
などというものなら、タダではすまない。

あいさつは、敵意のないことを示す方法である。あいさつを省略すると、敵意をいだいていてと誤解されてもしかたがない。

ヨーロッパ、アメリカの人は、会うと、握手あくしゅをする。日本人もこのごろは、握手をする人がふえた。皮膚ひふのふれ合いを通じてのあいさつはそれだけ強い結びつきのようにも思われるが、別の考え方もできる。

握手は、おたがいに武器をもっていないアカシだという解釈かいしゃくがある。⑧ ⑧ そういうように考えると、握手がいかにもあさましく感じられる。

そういえば、欧米人おうべいじんは、会ったとき、たがいにたがいをだきかかえるようにする。われわれはあれをいかにも親密なあいさつの方法のように思って、若い人たちの間では、すこしずつ広まっている。

これももとは、相手が武器をかくしもっていないかどうかをたしかめる儀式ぎしきであり、敵意はないということを確認し合うものだったといわれる。そうしてみると、いかにもどぎついあいさつだが、いまは、もとの意味は完全に失われている。社交の上で、もし空港でのボディ・チェックのようなまねをしたら、たいへんなことになるう。

日本人は、昔から、相手のからだにふれるのを嫌きらったから、握手とか抱擁ほうようといったあいさつの形式が生まれるはずもなかった。かりにそれに、さきのように、一種のボディ・チェックの意味合いがあったとするなら、それまで相手を信用できなかった社会をあわれに思う。

われわれは、ことばのあいさつで足りるとした。相互そうごの信用がそれだけ大きいのだということもできるし、めいめいのもっている心理的領域が大きく、ふところが深いから、相手を近くに近づけなかったのだと考えることも可能である。

(外山滋比古「新編かたりべ文化」より)

※(注) 一隅いっく——片すみ。

ドライ——感情的にならず、あっさりとして割り切って物事を行う様子。

問一 —— 線 a 「角が立つ」とはどのような意味ですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 腹が立って、むしゃくしゃする。
- イ 自分が一方的に悪者になってしまう。
- ウ 鬼おにのようなおそろしい顔つきになる。
- エ 人との関係がおだやかでなくなる。

問二 —— 線 b 「テイケイ」、c 「タイ」を漢字に直しなさい。

問三 —— 線①「この研究者は、ひどく評判が悪くなりだした。」とありますが、「この研究者」の評判が悪くなりだした原因として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 郵便物は毎日届くものでもないのに、ほぼ毎日、オフィスに自分の郵便物を取りに来たこと。
- イ 英語が苦手だったため、オフィスの女性たちに気の利いた冗談を言うことができなかったこと。
- ウ あいさつをしたら、あいさつを返すのがマナーなのに、女性たちの声かけを無視したこと。
- エ オフィスにいつも黙ってやって来て、郵便物をもつと、周りに声をかけずに黙って帰ったこと。

問四 文中の A にあてはまることわざとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 千里の道も一歩から
- イ 郷に入っては郷に従え
- ウ 沈黙は金なり
- エ 長い物には巻かれる

問五 —— 線②「ハナをつき合わせているのは、人間にして人間にあらず、木石と考える。それがラッシュユの乗物の中のエチケットである。」とありますが、「人間にして人間にあらず、木石と考える」ことが「ラッシュユの乗物の中のエチケットである」とはどういうことですか。答えとなる次の文の空らんにあてはまる語句を文中から六字でぬき出して答えなさい。

満員電車の中では、隣りあわせた人間同士はお互いに（ ）がエチケットである。

問六 —— 線③「とんだ誤解である。」とありますが、どのような「誤解」ですか。できるだけ文中の言葉を使って、解答らんの「という誤解」につながるように、三十五字以上四十字以内にまとめて答えなさい。

問七 —— 線④「『おそよう。』などといえば、これはあいさつではなくなって、ことば本来の意味をもつようになる。」とありますが、「おそよう。」の「ことば本来の意味」とはここでは具体的にどのような意味だと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア あいさつを返すのが遅いということ
- イ 来るのが遅いということ
- ウ 夜遅い時間に会ったということ
- エ 歩くスピードが遅いということ

問八 —— 線⑤「入ってくるものは承認を求めする必要があります。」とありますが、「入ってくるもの」が「承認を求める」ために必要なものは何ですか。文中から一語でぬき出して答えなさい。

問九 — 線⑥「こういうことは半ば動物的本能によるのかもしれない。」とありますが、「こういうことは半ば動物的本能による」とはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア デパートや展覧会に行った時の疲れの原因は、人間が本来集団で行動しない習性をもっていることによるのだということ。
- イ デパートより静かな絵などの展覧会を見て帰ったときの方が疲れているのは、動物が静けさを苦手とすることによるのだということ。
- ウ 心理的ナワ張りに他のものが入ってくることに無意識に反発するのは、生まれつき備わっている習性による面があるのだということ。
- エ 自分の心理的ナワ張りをほかのものに常に侵入しんにゅうされていると思うのは、人間が動物より進歩した知性をもっていることによるのだということ。

問十 — 線⑦「なおかつ心のどこかで、それに違和感いわかんをもつ。」とありますが、どのようなことに違和感を持つのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 他人のナワ張りに入ること
- イ 人間をモノだと思うこと
- ウ 電車などを木石だと考えること
- エ あいさつをされないこと

問十一 文中の **B** にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア ところが
- イ あるいは
- ウ たとえば
- エ なぜならば

問十二 — 線⑧「そういうように考えると、握手あくしゅがいかにもあさましく感じられる。」とありますが、それはなぜですか。答えとなる次の文の **1** ・ **2** にあてはまる語句を文中からぬき出して答えなさい。ただし、**1** は十字以内、**2** は五字でぬき出すものとします。

握手あくしゅをすることが **1** のようになり、 **2** していないことを意味することになるから。

問十三 本文を内容の上で大きく二つの意味段落に分けるとすると、後半はどこから始まりますか。後半の初めの五字をぬき出して答えなさい。

問十四

この文章の趣旨として適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア まったく面識がない人間同士でも、近くをすれちがった時には、必ずお互いにあいさつをしななければならない。

イ 「おはよう。」のことが「早い」ことを表すわけではないので、あいさつをすること自体にも意味はない。

ウ 知り合いとすれ違った時に、あいさつをしないで無視すると、相手に敵対心を持っていると誤解されてもしかたがない。

エ 声に出したり、握手や抱擁のような態度に出したりしなくても、心で強く思えば自然と相手に伝わるのが本物のあいさつである。

三 漢字や言葉のきまりに関する次の各問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 今の会社にツトめて二十年になる。
- ② 神社に願いを書いたおふだをオサめる。
- ③ コクモツは人の主食となるものである。
- ④ この問題を解決するタイサクを考える必要がある。
- ⑤ 壁の割れ目から雨水がぼたぼたとタれる。

問二 次の①・②の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① アルバイトをして家計を補う。
- ② 刈り取った稲を束ねる。

問三 次の①～⑤のことばは、昔の話などによって広く使われるようになった故事成語です。下の意味になるように故事成語の()に入る適当な語をそれぞれのア～コの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 青雲の() 立身出世して高い地位を得ようとする気持ち。
- ② 竹馬の() 幼年時代からの親しい仲間。
- ③ 呉越同() 仲の悪い者同士が何かの事情でいっしょにいること。
- ④ () 水の陣 もうこれ以上逃げないで最後の決戦にのぞむこと。
- ⑤ 温() 知新 昔のことをよく調べてそこから新しい知識を得ること。

ア	人	イ	腹	ウ	故	エ	舟	オ	心
カ	友	キ	志	ク	昔	ケ	背	コ	居

問四 次の①～④の文中の——線部を適当な敬語表現に改めなさい。

- ① 先生から楽しいお話を聞いた。
- ② これは私が伯母に与えたおくりものです。
- ③ 会長の奥様が着た高級な着物です。
- ④ これは小学校を卒業したときに先生にもらった筆箱です。